

Newsletter for JADR

I . JADR の国際戦略を考える

JADR 会長 大谷 啓一

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
硬組織薬理学分野)

先日行なわれた JADR 理事会の席上で、黒田 IADR 会長より本年6月開催の第76回 IADR 総会・学術大会(オーストラリア・ブリスベン)の演題数がおよそ2800となり、その1/4が日本からのものであるとの報告がありました。黒田先生は演題2800というのは3月に行なわれる AADR よりも演題数が多く、大変喜ばしく、しかもその多くが日本からの演題で、大変誇らしいことだと述べられました。それを聞いて JADR 会員の IADR 大会出席への強い意欲が伝わってきました。また JADR2006年1月号の編集長 Dr. Tony Smith による報告において日本からの論文投稿数がアメリカとならんで群を抜いていることが図に示され、日本人研究者のアクティビティが高いことが明らかにされています。これらの事実は会員各位の研究活動が活発なこと、また研究内容も常に世界を意識した国際的なものになっていることを如実に示す成果と思われる。

昨年中央教育審議会から大学院教育の実質化を柱とした「国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて」という答申が文部科学大臣に提出されました。その中で大学院教育課程の充実・強化とともに学位の国際的な評価ならびに通用性を確保する必要性が述べられています。その目指すところは国際競争力のある優れた研究者養成、独創・先端的な基礎研究水準の向上、知的・文化価値の創造・充実です。この答申は大学に向けたものですが、JADRにもあてはまるように思えます。歯科医学の卓越した研究団体として名実ともに世界で唯一の学術集団として存在する IADR の一員として、JADR は上記答申の核心部分を実行できる能力を持っているからです。このことはブリスベン IADR 大会の演題数や JADR 投稿論文数から明らかです。JADR は大学とは別に、学術団体として国際競争力のある研究者養成のリード役となる戦略がますます重要になると思われます。

昨年秋に中国の IADR 部会(CADR)の学術大会に参加する機会を得ました。上海の立派なホテルで開催されましたが、演題数500を超え、会期後半には歯科機材展示会も開催された規模の大きい大会でした。IADR の主要メンバー、東南アジアの部会からのゲストが招かれて、プログラムもよく考えられていました。さらにその運営スタイルが IADR に近いものであったことに驚かされました。レセプション・パーティーなどはすべてス

ポンサー付で行なわれ、学会長のあいさつと伴に企業トップのあいさつがあるものでした。さらに学術発表、レセプションでのあいさつ、セレモニーなどを全て英語にて行なっていたことに強い印象を受けました。もちろん中国の歯学研究者も英語は不得意な人が大部分だと思います。しかし、努力して英語を使うという姿勢が常に感じられ、CADR は国際水準の学会を目指すということを強く印象づけていました。JADR も負けていられないという気持ちになりました。

2003年のスウェーデン・イエテボリ IADR 総会で日本、韓国、中国、東南アジア、オーストラリア・ニュージーランド部会が参加する Pan-Asia Pacific Federation (PAPF) の設立が承認され発足しました。PAPF は世界の地域性を考慮して IADR 会員の相互コミュニケーションを図る機関として結成されたもので、今後 JADR にとり大事な国際交流の場となります。PAPF 前会長・安孫子先生が JADR50 周年記念誌に書かれていますが、JADR として PAPF を盛り上げて東南アジア地域での国際交流を実現する方策を重視することが必要と思われる。現在理事会では国際戦略の一つとして2007年秋開催の JADR 学術大会にて英語プレゼンテーションを導入する方策を考えています。すぐに全ての演題を英語にて発表することは無理な面もあるかと思いますが、移行期を設けて徐々にでも JADR 大会をより国際的な学術交流の場として生れ変らせたいと思います。そのようにして PAPF 交流の基盤を作り、PAPF 所属の division が競って演題を応募するような大会になればと夢を描いているところです。

ブリスベン IADR 大会に演題を申し込み、あるいは参加される JADR 会員は御自分の研究成果を発表して、国際的な評価を得たいと思う方々が大部分と推察します。また外国の研究者と情報交換を行い交流する楽しみを期待される方も多いと思います。JADR としても国際的立場でリーダーシップを発揮できる世界水準の会員が続出することをサポートし、それに向けた戦略を構築すべきでしょう。国際性豊かな研究者と言う言葉はよく聞きますが、それが概念的なものでは意味がありません。真の国際水準の歯科医学研究者が活躍する場として JADR が貢献できればと願っています。

Ⅱ . 第 53 回 JADR 総会・学術大会報告

1. 第53回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会の報告

大会長 山本 照子
(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科顎顔面口腔矯正学分野)

会員の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

2005年度のJADR総会・学術大会を、平成17年11月26日、27日の両日にわたり、岡山大学創立五十周年記念館において開催させて頂きました。

本大会では、ヘルシンキ大学 Prof. I. Thesleff, Journal of Dental Research 編集委員長 Prof. A.J. Smith, ソウル大学 Prof. C-P Chung に特別講演を行って頂きました。また, Dr. Smith には, 若き JADR 研究者に向けて“Publishing your manuscript: a JADR perspective” と題したワークショップも行っていました。シンポジウムならびにランチョンシンポジウムでは各分野の最先端の研究者を迎え最新の研究内容のご発表と活発な討論をして頂きました。また、市民公開シンポジウムでは多くの市民の方のご参加を頂き、「口と全身の健康」をテーマとして5人の演者の方にご発表頂きました。一般演題として、35題の口演発表と71題のポスター発表が行われました。

一日目には、シンポジウム「軟骨代謝研究の最前線」と題し、滝川正春教授(岡山大学)をモデレーターとして、4人の先生方の軟骨発生のメカニズムに関する最新の研究についての御講演と活発な意見交換がなされました。続いて、パーミンガム大学 Prof. A.J. Smith の特別講演“Dentin regeneration”にて、象牙質の再生に関する興味深い話を聞くことができました。午後からは、ヘルシンキ大学 Prof. I. Thesleff による“Regulation of tooth morphogenesis by signalling molecules and their inhibitors”の特別講演を頂きました。歯胚発生の制御について、世界をリードする先生のご発表はすばらしく、歯の発生の初期、歯冠(咬頭)形成、歯の硬組織形成の分子メカニズムについて壮大な研究内容を講演頂き、聴衆に感銘を与えました。1日目最後には、岡崎正之教授(広島大学)をモデレーターとして、「最先端のバイオマテリアルを語る」と題したシンポジウムが行われました。高分子、セラミック、金属の各分野をリードする4人の先生を迎え、最新のハイレベルな話題を伺うことができました。夕刻、リーセントカルチャーホテルにて懇親会が行われ、JADR 会長黒田敬之先生、日本歯科医学会、岡山大学渡邊達夫歯学部長をはじめ海外の特別講演の先生方他、多数の先生の参加を頂き盛大に行いました。

二日目の午前には、シンポジウム「歯周病原細菌の病原因子」のモデレーター小川知彦教授(朝日大学)の進行のもと、4人の

先生方によるホットな歯周細菌の話題についてお聞きすることができました。さらに総合討論では、現状の問題点と将来展望も議論されました。引き続きオーストラリア/ニュージーランド部会の代表 Dr. Z. Morse による次期 IADR の紹介が行われ、軽快なトークとDVDによる美しいオーストラリアの海とブリスベンの街並みが会場に映し出されました。次いで、KADR 会長も務められたソウル大学 Prof. C-P Chung による特別講演“Novel trials for active osteopromotion of surface modified biomaterials with synthetic binding peptide”では、生体材料の表面を修飾することにより、材料周囲の骨化を促進する新しい試みが紹介されました。2日目午後には私たちの行っている歯科医学研究を、日常生活に役立つ歯科医療情報としてわかりやすくお伝えするために、市民公開シンポジウム『口と全身の健康』を企画しました。モデレーターの皆木省吾教授(岡山大学)、村山洋二名誉教授(岡山大学)の司会のもと、5人の先生方による味覚、要介護者への口腔ケア、いびき・睡眠時無呼吸、歯ぎしり、歯周病と全身疾患についての講演が行われました。100名を超える市民の方が参加され、メモを片手に頷かれている市民の方も多く、活発な質問も頂きました。

本大会では両日ともにランチョンシンポジウムを企画しました。一日目には、大阪大学大学院歯学研究科21世紀COE共催で米田俊之教授(大阪大学)をモデレーターとした「硬組織形成とリン代謝」にて、硬組織形成およびリン酸化に関する基礎研究、臨床研究が紹介されました。会場から多数の質問があり、予定時間を延長して質疑・応答が行われました。二日目には、梶谷文彦教授(川崎医療短期大学)と山本照子(岡山大学)がモデレーターとなり、「血管と骨のフィジオーム」を企画しました。梶谷教授のバイオメカニクスにおけるフィジオームの展開として心臓のコンピューターシミュレーションに続き、血管、



山本大会長と来賓ならびに理事

骨における研究の紹介がなされ、多数の会員が工学と医歯学との連携の重要性を再認識しました。

Hatton 賞については、JADR 理事や海外からの特別講演者他、多数の参加者が集まる中、初めての試みとして5名の候補者による英語での発表と公開討論が行われました。候補者は本番さながらの緊張した面持ちで発表・質疑応答を行い大変有意義な体験ができたと思われまます。また、昨年に引き続き若手研究者の優秀演題に対する学術奨励賞の選考が行われ、別項にあるように3名の受賞者が選ばれ、大会最後に表彰式が行われました。さらに、今回の大会では、JDR 編集委員長 Prof. A.J. Smith のご提案によるワークショップとして、JDR 投稿に関するキーポイントを大変わかりやすくご指導頂きました。参加したメンバーは、国際色豊かな大学院生を含む若き研究者達で、活発な質問に対して Smith 先生の適切な応答がなされ、3時間の予定は瞬間に過ぎました。

本大会の参加者数は、一般市民の方も含めると440名と多くの参加者があり、どのセッションも盛況で互いに有意義な情報交換が各分野でみられ、成功裡に終了することができました。最後に、JADR 会長黒田先生ならびに JADR 会長大谷先生をはじめとする理事の先生方には、本大会を開催するにあたり終始貴重なご指導とご助言を頂きましたことに心から感謝申し上げるとともに、JADR 会員の先生方のご協力とご支援に対しまして深謝申し上げます。

2. シンポジウム

「最先端のバイオマテリアルを語る」

岡崎 正之

(広島大学大学院医歯薬学総合研究科生体材料学研究室)

本シンポジウムは、従来から用いられている歯科材料および生体材料の重要性や材料学的特性に対する理解を深め、それらの将来展望を拝聴いただいた方々と一緒に考える機会を持つことを目的として企画されたものである。

最初に、私が過去から現在までの生体材料の変遷を紹介し、生



JDR Editor-in-Chief Prof. Smith による特別講演

体材料の概念と将来展望の一端についてお話し前座とした。その後、高分子、セラミックス、金属材料の各専門の立場から、現在第一線で活躍されている著名なお三方にご講演をいただいた。

田畑泰彦先生(京都大学)は、数多くの研究を多面的に展開されており、その一環としての高分子ハイドロゲルを用いた組織再生と将来展望についてのお話をされた。最近の幹細胞を利用した再生医療の研究には、驚くべきものがあるが、その応用に当たってはスカフォールドのような細胞の足場が必要である。特に、DDS (drug delivery system) を利用して成長因子を目的のターゲットに徐放させようとの研究を精力的に進めておられ、その一端を紹介された。

石川邦夫先生(九州大学)は、従来の焼結ハイドロキシアパタイトが、一定の強度を有するものの、代謝性がない事を考慮し、炭酸カルシウムのブロックをリン酸二ナトリウム溶液中に浸漬することにより炭酸アパタイトへ相変化させる研究を進めておられる。本シンポジウムでは、破骨細胞の吸収特性や炭酸アパタイトの骨への置換について化学的反応論の観点からお話され将来展望について述べられた。

埴 隆夫先生(東京医科歯科大学)は、金属が十分な耐久性や機械的強度を備えており医療現場での信頼性が高いことから、この特性を生かし多くの研究を展開されている。特に、高分子と金属との複合体を創製することによる組織と金属との界面における親和性の改質に関する研究や、金属の新規医療デバイスへの将来的応用に関する紹介があった。

シンポジウムでは、終始熱心に拝聴いただき、討議・質問の時間もあつという間に過ぎてしまった。このシンポジウムを通じて、改めて歯科材料・生体材料の重要性を認識することができ、将来への光明を垣間見たような気がする。とりわけ、「生体材料学」として、材料学と生物学の融合に基づいた「材料と界面との反応に関するメカニズムの分子生物学的解明」の重要性を強く感じた。

最後に、このようなシンポジウム開催の機会を与えていただいた大会長の山本照子先生並びに関係の諸先生方に厚く御礼申し上げます次第である。

3. Dr. Smith ワークショップ

「Publishing Your Manuscript - a JDR Perspective」に参加して

西田 伸子

(大阪大学大学院歯学研究科予防歯科学教室)

第53回 JADR 学術大会・総会のプログラムを何気なく見ていたところ、Journal of Dental Research (JDR) の編集委員長 Anthony J Smith 先生による、若手研究者を対象とした JDR への投稿に関するワークショップが開催されるという記事が私の目に飛び込んできた。当然、コミュニケーションツールは英語であり、多少の不安もあったが、よい勉強になると思い参加させていた。今回、そのワークショップについて報告したい。

通常、ワークショップでは、講師の指導のもと参加者が何らかの作業をするが、今回は時間の都合上、Smith先生の講義を拝聴するというスタイルになったようである。参加者は、大学院生、ポスドク、留学生等、様々なバックグラウンドを有する若手研究者およそ20名であった。はじめ、参加者数が少ないように感じ、せっかくの機会なのにもったいないと思っていたが、ふり返ってみると、少人数であったおかげで雰囲気もよく、参加者も充実感が得られたのではないかと思う。

会場に現れたSmith先生は、開口一番、「さあ、リラックスしてこのワークショップを楽しもう。堅苦しいことはなしだよ」とおっしゃったので、英語によるワークショップを前に、多少なりとも緊張していた我々はほっとした。内容は、Talk 1; PUBLISHING YOUR MANUSCRIPT - A JDR PERSPECTIVE、Talk 2; DEALING WITH REVIEWS - A JDR PERSPECTIVEの二部構成で、質問は各自が英語で行ったが、込み入った内容の場合等、必要に応じてスタッフの先生が通訳をして下さり、参加したもののよく分からなかったということのないよう配慮がなされていた。

はじめに、JDRには年間約500編のsubmissionと、それと同程度のrevisionがあり、採択率は30%程度であること、査読が順調に進んだとして、submissionからpublicationまで6ヶ月(うち、acceptanceからpublicationまでは2ヶ月)程度かかっているとの話があった。Smith先生によると、「速やかに査読をするために最大限の努力をしているし、そのためにも投稿規定を遵守してほしい」とのことであった。

ワークショップはInstructions to Author for JDRに準じた内容で、なぜ論文を書くのか、自分の研究成果を誰と分かち合いたいのか、それにより投稿先は決まるものであって、決してSIF (Scientific Impact Factor)が高いからという理由で決めるべきではないということ、さらに、物語を語るように、それでいて論理的に論文を仕上げなさいとの助言があった。他にも、revisionという状況を取りあげ、どのような対応が投稿者側に求められるのか、査読する立場からのコメントも聞くことができ、興味深い内容であった。

休憩を含め3時間という予定時間ぎりぎりまで質問等活発なディスカッションがあり、終了後も先生は質問を希望する参加者に囲まれておられた。

最後に、特に若手研究者のために、このような貴重な機会を設けてくださった第53回JADR学術大会長の山本照子先生をはじめ、関係の先生方に感謝申し上げたい。

4. Dr. Smith ワークショップ

「Publishing Your Manuscript - a JDR Perspective」に参加して

角田衣理加・安成 詩子
(鶴見大学歯学部口腔細菌学教室)

私たちは、去る11月26、27日に岡山大学にて行われた第53回国際歯科研究学会日本部会(JADR)総会・学術大会にてJournal



JDR Editor-in-Chief Prof. Smith によるワークショップ

of Dental ResearchのチーフエディターでおられるDr. Anthony J Smithによるワークショップ「Publishing your manuscript: a JDR perspective」に参加した。参加者は20～30名で、Dr. Smithは2部にわたり、論文執筆のポイントから投稿・査読・受理されるまでの流れを解説された。

第1部「論文投稿」

自分が行った研究を論文にすることの意義、どの雑誌に投稿するか、また執筆する際、自分の行った研究の全体像をいかにストーリー化して述べるのが大切であるか示された。チーフエディター側から見た論文投稿の際の一番の注意事項として、投稿規定を守っていない論文が数多く見受けられるので、そのようなミス在未然に防ぐために、投稿規定を熟読することが肝要であると述べられた。また、査読者は毎日多くの論文を受け取っているため、投稿者はいかにして査読者にアピールしなければならないか。つまり、インパクトのあるタイトル・単純明快な概要も非常に重要であると述べられた。

第2部「査読処理」

論文投稿後のお話で、論文を受け取った査読側の1番最初のチェックポイント(行われた研究の目的が明瞭で、かつ医科学的に有意で将来性がある論文かどうかなど)を教えていただき、次いで言葉、図表が適確であるかなどの細かい査読の流れを説明していただいた。査読者は著者の力になろうとコメントしているのだから、査読を受け取ったら、査読者の意図する点を考えながら念入りに直していくようにとのことだった。

Dr. Smithは終始、受講者の質問に笑顔で気さくに答えてくださる温かみのある方であった。このようにJournal of Dental Researchのチーフエディターから直接、論文投稿のお話を伺うチャンスは実に貴重であり、論文投稿に対する大きな意欲の源となった。この経験を今後の論文投稿の際に大いに役立てたいと思う。最後に、ワークショップを企画してくださった第53回JADR大会長の山本照子先生をはじめとする関係者の皆様に深く感謝いたします。

5. Pulp Biology / Orthodontics

梶井 貴史

(北海道大学大学院歯学研究科歯科矯正学教室)

第53回JADR学術大会は2005年11月26, 27日に岡山市で開催された。私は今回, JADR学術大会に初めて参加したので, Pulp Biology / Orthodonticsセッションの報告に加えて, 学会全体に対する感想も述べさせていただく。

まず, Pulp Biology / Orthodontics セッションであるが, ポスター発表のみで8演題であった。Pulp Biologyの発表としては, 大阪歯科大の口腔解剖学講座より, ラットの歯髓由来細胞を移植した際におけるスキャフォールドの検討についての発表があった。Orthodonticsの発表としては, 様々な方面からの報告がなされていたが, その中でも, 矯正治療の際の歯牙移動に伴う痛みを軽減させるのにレーザー照射が有効である, という報告が複数, 岡山大の顎顔面口腔矯正学分野と東京歯科大の歯科矯正学講座からなされた。この分野が近年, さらに今後の矯正歯科の注目分野になることが示唆されるような, 非常に興味深い2つの発表であった。

また, 私たちの教室から, 唇顎口蓋裂患者における口蓋形成術の差異が顎顔面形態に与える影響について発表させていただいた。さらに, 福岡歯科大の矯正歯科学分野からの, Skeletal Anchorage Systemを用いて下顎大臼歯を遠心移動する際の光弾性応力解析の報告や, 徳島大の口腔顎顔面矯正学分野からの, 歯根膜細胞にメカニカルストレスを付加した際のRhoEとRGS2の動態の報告などが, 個人的には特に興味深い発表であった。

一方 私も口演させていただいたMaterial Science, Developmentセッションだが, 質疑応答時間が5分と比較的長く, 活発な討論がなされて, 非常に有意義であった。

最後に, 学会全体に対する感想であるが, ある程度同じ方向・分野に興味を持っている研究者たちが, じっくり討論できる, 非常に有意義な場であると強く感じた。特に, 臨床講座に属する我々のような研究者には, より専門性のある研究者にアドバイスをいただける貴重な場であった。また, Hatton Award Competitorsの先生方のあの緊張感は何ものにも代えがたい経験となるであろうし, 今回私も参加させていただいた, Dr. SmithのJDR掲載に関するWorkshopは, 大変有意義なものであり, 自分の財産となった(主幹講座の出口先生お世話になりました)。次回からは, JADR学術大会には是非とも毎回参加したいと考えている。

6. Dental Materials - Adhesion

二階堂 徹

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科摂食機能保存学講座
う蝕制御学分野)

第53回JADR学術大会のAdhesionのカテゴリーで発表された演題は, ポスター4題のみだが, 他の分野においてもAdhesion

に関連する興味ある発表があり, 全体としては8題の発表であった。全体の演題数から考えると少数派とはいえ, 大変見ごたえのある発表が多かった。

一般に象牙質接着の研究は, オールインワン接着システムを扱ったものが多いが, 近年接着直後の接着性の評価だけでなく, 接着安定性や接着耐久性の面から評価するものが増えてきた。本学術大会のAdhesion分野においても, そのような報告が主流を占めた。Yoshidaらは, 3種のセルフエッチングプライマーシステムの象牙質に対する接着安定性について検討し, 異なる機能性モノマーを含むボンディングシステムの接着安定性と接着界面の分析結果から, 機能性モノマーのヒドロキシアパタイトに対するChemical bondingと接着安定性について考察していた。Torkabadiら, Uminoらは, 最近のオールインワン接着システムの1年間の接着耐久性について検討し, 接着材料による接着安定性の違いを報告していた。Yuanらは, オールインワン接着システムにおける接着界面のFE-SEM観察から, nanoleakageについて検討を試みている。Danehmehrらは, 根面う蝕の抑制にオールインワン接着システムをレジンコーティング材料として用いる新たな試みを行い, 実際に根面への細菌付着を抑制できることを報告している。

象牙質接着システムの前処理材の改良や金属プライマーの塗布効果についての研究報告もあった。Soenoらは, 4-META/MMA-TBB系レジンの象牙質に対する接着についてクエン酸-塩化第二鉄処理を改良したアスコルビン酸による新しい前処理材を試作し, その有効性について発表した。Komiyaらは, 前装冠に用いる硬質レジンとチタン境界部における金属プライマー塗布の有効性について歯ブラシ磨耗試験を行って検討し, 金属プライマー処理が硬質レジンとチタン境界部における耐摩耗性に有効であることを報告した。Nayifらは, 窩洞モデルを作製し, これに接着充填したフロアブルレジンの引張り強さと硬さの測定を行い, フロアブルレジンの重合収縮と重合深度が引張り強さと硬さに及ぼす影響について明らかにした。

ところで, 本学術大会1日目の午前中には, Anthony J Smith教授の特別講演があったが, 午後は大谷啓一会長より急遽お話を頂いて, Smith先生の岡山観光ご案内役をお引き受けし, 昼食後, 教室員とともに後楽園, 岡山城にお連れした。幸い小春日和で散策には都合よく, 紅葉も見ごろで, Smith先生とのんびり園内できび団子とお茶をいただいたのは我々一同のよい思い出となった。

7. Mineralized Tissue

林 達秀

(愛知学院大学歯学部歯科理工学講座)

第53回国際歯科研究学会日本部会総会・学術大会は山本照子教授を大会長に, 2005年11月26・27日の会期で岡山大学において開催された。

Mineralized Tissueのカテゴリーでは口頭発表が7題, ポスター

発表が8題の計15題あった。26日午後からの口頭発表ではCCNファミリーの機能と性質についての発表が複数あった。これらの発表内容の一部を紹介すると、CCNファミリーの一つであるCCN2 (CTGF; Connective Tissue Growth Factor) は歯胚未分化間葉細胞を象牙芽細胞に分化させることを促進していることや、ファイブロネクチン1がインテグリンレセプターに結合するのを促すことによって、結果的にCCN2は細胞接着能を高めていることを報告したものであった。これらの発表は同日午前中に行われたシンポジウム1「軟骨代謝研究の最前線」の中の一つであった、岡山大学 久保田聡先生・滝川正春先生の講演の軟骨内骨化と軟骨組織の再生にはCCN2が関与しているという実験結果が礎となっているものである。

Mineralized Tissueに関連するポスター発表は27日にあった。中でも特に関心を持った発表は、過酸化水素をマウスの骨芽細胞様細胞であるMC3T3-E1細胞に作用させた時の影響を組織学的・分子生物学的に観察したものである。過酸化水素による酸化ストレスが骨芽細胞様細胞に与えられると、細胞の成熟化が抑制されることにより、酸化ストレスは骨形成に抑制的に働くことを示唆するという内容であった。

最後に手前味噌になるが、本学術大会においてJADR学術奨励賞および、歯科材料グループ日本部会に設けられているDMGC J研究賞の二つの賞を受賞することができた。発表内容は*in vitro*において骨形成因子であるBMPを胎仔ラットの未成熟筋組織に作用させることによって、同組織から軟骨組織を分化・誘導させることが可能となったというものである。今回の参加は個人的にはとても思い入れ深いものとなり、また、これらの賞を受賞を励みにして日々の研究に取り組んでいきたいと思う。

8. Periodontology

山田 聡

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座)

今年の第53回JADR学術大会は、岡山大学大学院医歯薬総合研究科・顎顔面口腔矯正講座の山本照子先生を会長として、晩秋の岡山で開催された。日本部会ということで、もちろんJADR程の盛大さはないものの、硬組織の形成・代謝や歯の発生にフォーカスして、歯科医学に限らず生物学の分野で世界に名だたる研究者が多数集まり、非常に内容が濃くUpdateな講演や研究発表が成された2日間であった。

今回、自分の専門分野であり私自身の口演発表の機会が得られたPeriodontology分野についてレポートしてみたい。今年の学会では、Periodontology, Microbiology, Neuroscienceの3分野合

同のセッションが組まれており、そのうちPeriodontologyとして数演題の発表があった。このうち、私が拝聴した3つの発表演題について報告する。まず最初の演題は、岡山大学のグループによる高コレステロール摂取による歯肉組織への影響をラット実験モデルを用いて解析したものであった。これまでの知見からコレステロール摂取が歯肉の増殖を誘発することが知られていた。本研究の結果、高コレステロール食をラットに摂取させることにより増殖した歯肉組織内において、TGF- β とそのレセプターの発現が増加することが明らかとされ、コレステロールによる歯肉組織増殖の分子メカニズムの一端が示された。次に、私たちのグループから、歯根膜細胞の硬組織再生過程におけるSFRP4分子の関与についての発表をさせていただいた。DNAチップを用いた網羅的な遺伝子発現解析の結果、ヒト歯根膜には、SFRP4が高発現していることを見出し、SFRP4分子が、歯根膜の細胞分化を制御していることを明らかとした。SFRP4は、生体の発生や器官形成に重要な役割を果たしているWnt分子のアンタゴニストとしての機能が示唆されており、歯根膜細胞の分化制御にWnt/SFRPシグナル系が関わっているという興味深い結果が得られた。3つ目は、日本大学のグループから、細胞の不活化技術を用いたヒト歯根膜細胞のクローン化に関する興味深い発表が行われた。最新の研究からヒト歯根膜には組織型幹細胞が高率で存在していることが知られており、それら幹細胞をクローン化することにより、歯根膜研究の大きな進展が期待される研究発表であった。

今回のJADRでは、フィンランドのThesleff博士をはじめ、世界に名だたるトップ研究者の講演を自由に拝聴できるという貴重ですばらしい機会を得ることができ、この学会への参加は非常に意義深いものであった。



懇親会にて Prof. I. Thesleff の挨拶

Ⅲ .評議員会および総会報告

JADR 幹事 青木 和広

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
硬組織薬理学分野)

本年度は、理事会4回(2月14日,5月9日,8月29日,11月25日),評議員会および総会(11月26日)が1回ずつ開催されました。

1)2005年度会計決算は、奥田 克爾監事並びに零石 聰監事による監査承認後,2006年度予算と共に第4回理事会承認を経て,評議員会および総会において承認されました。

2)2006年度事業計画

以下の2006年度事業計画が提案され承認されました。

選 挙: 次期副会長選挙

総会・評議会: 第84回IADR総会(Brisbane, Australia)と同時開催する第54回学術大会開催時

理 事 会: 4回開催

学 術 大 会: 第54回学術大会 6月28日~7月1日,第84回IADR総会のCo-Hostとして同時開催予定
学術奨励賞を授与

Newsletter: 2回発行(2,9月発行予定)

会 計 監 査: 11月中旬

KADR学術大会へ講師派遣(2005年12月)

IADR 2006年度評議会へ役員派遣(4名)

PAPF 2006年度運営委員会へ役員派遣(3名)

2007年度Hatton Award候補者選考(5名)

IADR各種Committeeへ委員推薦

IADR本部へJADR Annual Report提出

50周年記念誌の発行

3)終身会員推挙

会則に従って,以下の先生が終身会員として,理事会より推挙され,評議員会および総会において承認されました。

(ABC順,敬称略)

高橋 純造,谷 明

4)前大会長へブランク贈呈

前大会長の大谷 啓一教授へ感謝のブランクが贈呈されました。

Ⅳ .理事会報告

JADR 副会長 小田 豊

(東京歯科大学歯科理工学講座)

ニュースレター2005年第2号発行後に開催された理事会(2005年度第4回,2005年度臨時,2006年度第1回)での,主な報告事項,協議事項についてご報告申し上げます。

1)2006 Hatton Awards 候補者の決定

2006 IADR Brisbane総会のHatton Awards 候補者として,以下の5名が選出されました。

郡司掛米谷香織(九州歯科大学健康促進科学専攻,Senior-Basic)

「Trigeminal Neuropeptides Affect Unopposed-Tooth Extrusion Resulting from Tooth Extraction」

坂上 直子(新潟大学歯学部,Junior)

「Osteoclastic presence, but not resorption, is essential for osteoblastic activity」

谷川 千尋(大阪大学大学院歯学研究科顎顔面矯正学教室,Senior-Clinical)

「Automatic Recognition of Anatomic Features on Cephalograms」

宮本 順(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面矯正学分野,Senior-Clinical)

「Oral Cortical Representations in Humans: a Functional MRI Study」

横井 隆政(愛知学院大学歯学部歯周病学講座,Senior-Basic)

「ADAMTSL-4 Regulated Assembly of Oxytalan Fiber during Periodontal Ligament Development」

2)2005年度学術奨励賞受賞者の決定

第53回学術大会の奨励賞受賞者として,以下の3名が選出されました。

出口 徹(岡山大学大学院医歯薬学総合研究科顎顔面口腔矯正学分野)

「歯の移動時における三叉神経節ガラニン陽性細胞の増加」

林 達秀(愛知学院大学歯学部歯科理工学講座)

「未成熟筋組織は*in vitro*でBMPによって軟骨組織に分化する」

別所 央城(東京歯科大学口腔外科学講座)

「ヒト口蓋粘膜への電気刺激による大脳皮質の応答」

3)評議員の一部交代

九州大学の花澤重正教授の異動にともない,同大学の山下喜久教授が新たに評議員に就任されました。

4)2006 IADR Council Meeting, PAPF Council, Meetingへの派遣

2006 IADR Council MeetingならびにPAPF Council Meetingへ,大谷啓一会長,小田豊副会長,村上伸也会計理事,黒田敬之IADR会長を派遣することとなりました。

5)50周年記念誌「JADRのあゆみ」の発行

50周年記念誌「JADRのあゆみ」が完成しました。Newsletter 2006-1とともに会員宛発送予定です。

6)名誉会員,終身会員の推戴

新終身会員として,千葉元丞,阿部公生両先生を推戴することとなりました。なお,新名誉会員は該当者がありませんでした。

7)次期会長候補者決定

次期会長(副会長07-08,会長09-10)候補者として,高野吉郎先生(東京医科歯科大学)を推挙することが提案され,満場一致で可決されました。2006年3月~4月にかけて信任投票を行い,Brisbaneで開催される第54回総会にて正式に承認を得る予定です。

8) 第55回総会・学会大会の開催

第55回総会・学会大会の大会長として、前田伸子理事(鶴見大学)を選出することが提案され、満場一致で可決されました。Brisbaneで開催される第54回総会にて承認を得る予定です。

V. 第24回 IADR 韓国部会 (KADR) 参加報告

JADR 副会長 小田 豊
(東京歯科大学歯科理工学講座)

第24回 IADR 韓国部会 (KADR) 年次大会は平成17年11月30日(水)に Seoul National University Dental Hospital で開催されました。KADRとJADR(国際歯科研究学会日本部会)は相互交流として学会大会時に特別講演の講師招聘を行っており、11月26、27日に岡山大学で開催された第53回国際歯科研究学会日本部会(JADR)学会大会にはKADRからChong-Pyoung Chung教授(Seoul National University)が来日され特別講演が行われました。今回は私がJADR理事会の推薦を受けてKADRに出席して、講演を行ってきました。

前日の29日夜に海外の演者を迎えての懇親会が催され、IADR韓国部会の初代会長や現会長のKyu-Ho Yang教授をはじめとする現役員と親しく懇談する機会を得ました。韓国部会では「IADRの誘致」発表を英語に限定するか否か、「会員の増強」などが課題とされているとのことでしたが、今後のJADRとの協力関係についても話し合うことができ、JADRの次期会長の任に当たる私自身にとって極めて有意義な会となりました。

学会当日は9:00からIADR会長の黒田敬之先生の「IADR: past, present and the future」とIADR理事のYupin Songpaisan先生の「Problem-based learning in dental education」の2題の特別講演が行われ、10:00から「幹細胞による再生」のシンポジウムが昼まで行われました。昼を挟んでポスター発表50題のディ

スカッションが行われ、午後2:00より私が「Research Topics of Dental Materials」と題して、チタンの腐食・変色研究の現状、オールセラミック修復材料の疲労強度と課題、接着性レジンセメントによる破折歯の再接着と表面処理、ファイバーポストの維持力など、当講座の研究を中心として歯科材料研究のトピックスについて講演しました。講演後に立派な大理石のプラーク(写真)を頂き、プラークに値する講演ができたか恐縮の思いをしました。

午後3:00から5:00まで「インプラント」のシンポジウムが行われました。当初私の講演予定は午前中と知らされており、帰国便を夕方設定していたため、最後まで参加することはできませんでしたが、参加者は150名程度でした。JADR理事会では学会大会の英語による口頭発表や討論に移行するための検討がおこなわれておりますが、KADRのシンポジウムの講演やポスターディスカッションでは韓国語が使用されており、単一民族の国では母国語での討論が活発にできるところから、英語に限定するのは難しい課題かと考えさせられました。

VI. 第6回 IADR 中国部会 (CADR) 参加報告

JADR 会長 大谷 啓一
(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
硬組織薬理学分野)

2005年10月24~26日の間、中国・上海にある Shanghai Everbright Convention & Exhibition Center International Hotelにおいて、第6回CADR学会大会が行なわれた。CADR大会は500演題以上が出される大会であり、また同時に歯科器材の展示会も開催され、多数の中国人研究者が参加していた。LOCは上海第2医科大学歯学部でProf. Zhiyua ZhangがLOC会長であった。演題数は口演245題、ポスター347題で合計592題、それ以外にkeynote speechとして黒田敬之IADR会長による講演をはじめ10題が行なわれた。25日の朝9時30分よりopening ceremonyが行なわれ、黒田IADR会長の挨拶、上海第2医科大学歯学部長の挨拶、その後各division(ANZ, SEA, 日本)の挨拶が行われた。その後keynote speechが一人40分程度で行われ、私は午前中の3題の講演を北京大学のDr. Yu Guong-Yanとともに座長をした。午後はDentsplyのStudent Clinical Program(SCP)のjudgeを依頼され、計11人の学生ポスタープレゼンテーションの採点を行った。SCPは日本で行なわれているものと同じであるが、tableには実験過程を示したり、用いた方法、実験器具がならべられていて、見ていてなかなか面白かった。内容はかなり高度なものから、治療方法を単にまとめたものなど千差万別であったが、必然的に研究のバックグラウンドを持った発表が高得点となった。学生の英語発表能力は高く、かなりのトレーニングを受けているように思えた。夜は懇親会が上海市東部にある新開地の大レストランで行なわれた。懇親会は全参加メンバーが



プラーク

等しく招待されており、参加者約500人がそれぞれ10人で円卓を囲む様子は日本の学会ではまず見ることはなく驚く光景であった。26日には一般演題が行なわれて、口演・ポスターの発表が行われた。内容は様々だが、キャンセル演題が結構あり、この点ではまだ学会としてのまとまりに欠けることもあるのではないかと感じた。質疑もあまり活発ではなかった。しかし、すべての発表を英語で行なっており、この点はJADRも見習うべきであろう。夜は閉会式が行なわれ、これまた全員がそろそろ大宴会であり豪華なものであった。なおCADR会長が北京大学のProf. Zhenkang Zhangより武漢大学のMigwen Fan教授に変わることになり、そのセレモニーも行なわれた。また次回CADR開催は2006年Brisbane大会にて行くとアナウンスされ、ANZ会長のProf. Mike Morganがニコリしていた。

今回学会に参加して思ったことは、JADRはCADRよりも学術面での優位性はあるが、英語による学会運営など見習う点も多いようである。学術レベルも近い将来同じレベルになると予想されることから、東アジア地域のパートナーとして今まで以上に重要なポジションをCADRは占めると思われる。JADRとしてもこのような点をよく理解した上で中国の歯科医学研究者とさらに友好を深める必要がある。

VII .Brisbane awaits you

IADR Brisbane 2006 Chair Rod Marshall
(University of Queensland Dental School)

Australia, one of the most popular destinations in the world, and this year the home of the 84th General Session and Exhibition of IADR. Even more important for our region, it will be the first meeting of the Pan Asia Pacific Federation(PAPF) of IADR when we meet together in Brisbane, Queensland. All the members of PAPF including JADR have agreed to only hold meetings in Brisbane in 2006. So this represents your one chance to show the world, your world class research. The general session is only rarely held in our region, so this years



meeting in Brisbane is a great opportunity to see the most up-to-date dental science in the world.

Australia has a host of exciting and different opportunities for the visitor. Come and get up close with unique wildlife such as koalas, kangaroos, platypus; creatures only found in Australia. See the Great Barrier Reef, the largest coral reef in the world and visit world heritage listed rainforests and sand islands. Australia's unique environment offers a wide range of recreational opportunities from ballooning in the desert, to working cattle properties, five star golfing, game fishing, and scuba diving to name but a few. But there is also fine dining, superb world class wines, unique aboriginal culture as well as surfing, bushwalking and almost every adventure activity on offer in the world.

Brisbane sits in the heart of the east coast of Australia with a beautiful subtropical climate. It is well positioned for seeing the rest of Australia, but has much to offer in its own right. There are direct flights daily to Brisbane from Tokyo and Osaka and being in almost the same time zone, means you can get an evening flight and wake up for breakfast in Australia! JAL, Qantas and Australian airlines all offer direct flights and also the option to go via Cairns or the Gold Coast.

Japanese nationals can get an electronic travel authority (ETA) when you book your flight so there is no need to worry about visas. When you reach Australia you'll find the locals are very friendly and happy to show you around. We're used to having visitors from Japan and in tourist areas and major hotels you'll find many Japanese speakers as well as directions and information sheets in Japanese. Australia is a relatively easy and cheap destination to allow academics and students to get to an international meeting without the difficulties and expense of North America or Europe

It is winter in Brisbane in the middle of the year, which means clear blue skies with very little rain fall. Average temperatures are 10-20oC so it really is the best time of the year to come and visit. IADR will be great as usual, but rarely do you get the opportunity to combine work with pleasure in such a different and unique environment. Why not do as many others are and consider bringing your family for a holiday.

So join IADR President Prof Taki Kuroda in Brisbane, Australia for the best IADR since Chiba!

Here are some websites to help plan your trip:

<http://www.dentalresearch.org/meetings/brisbane/index.html>

<http://www.australia.jp>

<http://www.australia.or.jp/>

<http://www.queenslandholidays.com.au/>

<http://www.ourbrisbane.com/visitors/>

<http://www.ourbrisbane.com/visitors/experiencebrisbane/>

<http://www.brisbane-australia.com/>

<http://www.brisbane247.com/>

<http://www.goldcoasttourism.com.au/>
<http://www.airtrain.com.au/>
<http://www.brisbaneairport.com.au/>
<http://www.backpackbrisbane.com/>
<http://www.qantas.com.au/international/jp/index.html>
<http://www.australianairlines.com.au/international/jp/index.html>

Ⅷ . 第84回 IADR 総会 (Brisbane) の レポーター募集

第84回 IADR 総会が2006年6月28日(水)～7月1日(土), Brisbane で開催されます。9月発行予定の JADR Newsletter 第2号に IADR 総会のシンポジウムや学術発表の様子などをご紹介いただきたくご案内いたします。総会へ初めて参加される方からでも大歓迎です。レポーターをお引受けいただける先生は4月28日(金)までに事務局(E-mail:jadr@conet-cap.jp)までご報告下さい。多数お待ちしております。

Ⅸ . IADR SUMMARY CODE OF ETHICS について

JADR 副会長 小田 豊
 (東京歯科大学歯科理工学講座)

第84回 IADR 総会では ETHICS に関するシンポジウムとワークショップが企画されております。IADR の「SUMMARY CODE OF ETHICS」を転載しますので、ご参加の方は参照願います。

SUMMARY CODE OF ETHICS

I. Preamble

The purpose of this Summary Code of Ethics is to define general principles for the responsibilities of members of the International Association for Dental Research (IADR) in their research and scholarly activities.

II. Rationale

IADR, as a professional research association, expects that the special expertise of the membership carries with it the obligation to serve with the utmost sincerity and integrity. The Code of Ethics is based on an honor system, and adherence to the Code of Ethics is the responsibility of each member.

III. General Principles

The following General Principles should guide members in their research and scholarly activities.

All members of the IADR should:

- (1) act with honor and in accordance with the highest standards of professional integrity;
- (2) be guided by the conventions of scholarly pursuit;
- (3) promote exemplary ethical standards for research and scholarship;
- (4) conduct work with objectivity;
- (5) communicate information in a responsible manner, with due regard for the significance and credibility of the available data;
- (6) present scientific or professional judgments with full disclosure of the extent of financial support;
- (7) avoid judgments influenced by conflict of interest and declare interests when these may be perceived to have exerted an influence;
- (8) take actions necessary to ensure the rights and interests of research subjects, and observe the spirit and letter of the laws, regulations, and ethical standards with regard to the welfare of humans and animals involved in experimental or clinical procedures; and
- (9) not engage in any form of advertising which is false, fraudulent, deceptive, or misleading.

Reference can be made to the complete IADR Code of Ethics, which can be found in the Journal of Dental Research 73(7)1290- 1294, 1994. Only the summary printed here has been formally approved by the IADR.

X . 第54回 JADR 学術大会・総会案内

JADR 会長 大谷 啓一
 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
硬組織薬理学分野)

本年の第54回 JADR 学術大会・総会は、第84回 IADR 総会を Co-Host する形で Brisbane にて開催されます。したがって、本年は国内の学術大会は開催されませんので、あらかじめご了承くださいませよう願います。また IADR 総会では JADR がサポートする symposium “ Morphogenesis and Regeneration of Tooth and Bone ”が行われます。IADR 総会プログラムにて日時等をご確認の上、ふるってご参加ください。

なお、第54回 JADR 総会は、下記のとおり開催を予定しております。Brisbane へお越しの会員には奮ってご出席くださいますようお願いいたします。

開催日時：6月30日(金) 13:30 ~ 14:30

開催場所：IADR 総会会場内。詳細は Brisbane で配布されます Final Program をご参照ください。

主な議題：1. 報告事項

2006 年度事業報告

第55回総会・学術大会開催について

2. 協議事項

2006 年度会計中間報告(案)

2007年度事業計画(案)

2007年度会計予算(案)

3. 終身会員推挙

4. 前大会長へブランク贈呈

ただし本総会では、2006年度会計決算案のかわりに2006年度会計中間報告を行わせていただきます。2006年度会計決算案についてはNewsletter 2007-1誌上で承認を得ることとさせていただきますので、ご了承ください。

XI . 2006年度JADR 学術奨励賞実施のお知らせ

JADR 学術奨励賞選考委員会

JADR学術奨励賞は、学術大会での研究発表活動を奨励するとともに、歯学の発展に寄与する若手研究者の育成を目的として、2004年度(第52回学術大会時)よりスタートしました。

ご存知の通り2006年度開催の第54回JADR学術大会は、第84回IADR総会をCo-Hostする形でBrisbaneにて開催されます(別掲参照)したが、いまして、2006年度学術奨励賞は、第84回IADR総会にて行われた研究発表を対象として、最大5名に授与する予定です。応募方法については、詳細が決まり次第、JADRホームページ(<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr/index.html>)にてご案内させていただきますので、応募対象となります38歳未満の若手研究者の皆様は奮ってご応募ください。

XII . Hatton Awards 応募候補者 (2007年度IADR, New Orleans, LA) の募集

JADR Hatton Awards 候補者選考委員会

IADR Hatton Awardは第10代IADR会長Edward Hatton博士の功績をたたえて設けられた、IADRにおける若手研究者を顕彰するための賞です。2007年度の同賞の応募期間が近づいてまいりましたので、下記のとおりスケジュール(予定)をご案内申し上げます。多数のご応募をお待ちしておりますので、ふるってご応募ください。

5月上旬: JADR ホームページ (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr/index.html>) に募集要領掲載

6月上旬~7月上旬: 募集期間

7月上旬~8月上旬: 国内一次審査(書類選考)

8月下旬: 国内二次審査(英語による口頭発表会)

9月中旬: IADR 本部 abstract 提出締切

国内審査を経てJADRから選出された候補者はTravel Awardを授与され、New Orleansで開催される第85回IADR総会(2007年3月21~24日)でのHatton Award本選に参加します。本選では上位2名が順位付けで受賞者に選ばれます。

XIII . IADR Executive Director Dr. Fox 氏来日

JADR 会長 大谷 啓一

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
硬組織薬理学分野)

IADR執行部で事務局長を務めるDr. Christofer H. Fox氏が2月16~20日に日本を来訪した。Fox氏は黒田IADR会長とともにGC友の会50周年記念シンポジウムに出席して、長年のGC社によるIADRへのサポートに感謝の意を表した。



GC友の会50周年記念シンポジウムにてFox氏から感謝状を中尾社長に贈呈した。

右: Fox氏, 中: 中尾社長, 左: 黒田IADR会長

CONTENTS

I . JADR の国際戦略を考える	1	I .International Strategy of JADR	1
II . 第 53 回 JADR 総会・学術大会報告	2	Dr. Keiichi Ohya: JADR President	
1 . 第 53 回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会の報告	2	II .The 53rd Academic Meeting and Annual Business Meeting	2
2 . シンポジウム 「最先端のバイオマテリアルを語る」	3	1 . Summary of the 53rd Academic Meeting of JADR	2
3 . Dr. Smith ワークショップ「Publishing Your Manuscript - a JDR Perspective」に参加して	3	Dr. Teruko Yamamoto: The Chairman of the 53rd Academic Meeting of JADR	
4 . Dr. Smith ワークショップ「Publishing Your Manuscript - a JDR Perspective」に参加して	4	2 . Symposium “Frontier biomaterials symposium”	3
5 . Pulp Biology / Orthodontics	5	Dr. Masayuki Okazaki: Hiroshima Univ.	
6 . Dental Materials - Adhesion	5	3 . Dr. Smith Workshop “Publishing your manuscript - a JDR perspective”	3
7 . Mineralized Tissue	5	Dr. Nobuko Nishida: Osaka Univ.	
8 . Periodontology	6	4 . Dr. Smith Workshop “Publishing your manuscript - a JDR perspective”	4
III . 評議員会および総会報告	7	Dr. Erika Kakuta and Dr. Utako Yasunari: Tsurumi Univ.	
IV . 理事会報告	7	5 . Pulp Biology / Orthodontics	5
V . 第 24 回 IADR 韓国部会 (KADR) 参加報告	8	Dr. Takashi Kajii: Hokkaido Univ.	
VI . 第 6 回 IADR 中国部会 (CADR) 参加報告	8	6 . Dental Materials - Adhesion	5
VII . Brisbane awaits you	9	Dr. Toru Nikaido: Tokyo Med. Dent. Univ.	
VIII . 第 84 回 IADR 総会 (Brisbane) のレポーター募集	10	7 . Mineralized Tissue	5
IX . IADR Summary Code of Ethics について	10	Dr. Tatsuhide Hayashi: Aichi Gakuin Univ.	
X . 第 54 回 JADR 学術大会・総会案内	10	8 . Periodontology	6
XI . 2006 年度 JADR 学術奨励賞実施のお知らせ	11	Dr. Satoru Yamada: Osaka Univ.	
XII . Hatton Awards 応募候補者 (2007 年度 IADR , New Orleans , LA) の募集	11	III .Report of the Annual Business Meeting and the Councilors Meeting	7
XIII . JADR Executive Director Dr. Fox 氏来日	11	Dr. Kazuhiro Aoki: JADR Deputy Executive Director	
		IV .Report of the Board Meeting	7
		Dr. Yutaka Oda: Tokyo Dental College	
		V .Report of the 24th KADR Academic Meeting	8
		Dr. Yutaka Oda: JADR Vice-president	
		VI .Report of the 6th CADR Academic Meeting	8
		Dr. Keiichi Ohya: JADR President	
		VII .Brisbane awaits you	9
		Dr. Rod Marshall: IADR Brisbane 2006 Chair	
		VIII .Call for Reports of the 84th IADR General Session in Brisbane	10
		IX .IADR Summary Code of Ethics	10
		Dr. Yutaka Oda: JADR Vice-president	
		X .Announcement of the 54th JADR General Session	10
		Dr. Keiichi Ohya: JADR President	
		XI .Announcement for 2006 Young Investigator Award of JADR	11
		Young Investigator Award Committee of JADR	
		XII Call for the Hatton Awards Competitors of the 84th IADR General Session in New Orleans (2007) from JADR	11
		Hatton Awards Committee of JADR	
		XIII JADR Executive Director Dr. Fox on a visit in Japan	11
		Dr. Keiichi Ohya: JADR President	

編集後記

今回のニュースレターは第53回JADR大会報告を中心に企画させて頂きました。第53回JADR大会のレポーターの報告を読ませていただくと、国際的にも高水準の研究発表が行われていることや、Anthony J Smith先生 (JDR の編集委員長) のワークショップに参加された先生の声などに、大谷会長の言葉の「国際水準の歯科医学研究者の育成」に有効な大会となったことが改めて実感されます。第54回JADR総会はCo-hostのため第84回IADR-Brisbane大会と一緒にになりますが、多数のJADR会員の皆様の出席が予想されております。研究発表や研究交流に加えて素晴らしい自然が楽しめそうです。各研究分野でのご活躍を期待すると同時にJADR総会へのご出席をお待ちしております。

年2回発行のニュースレターですが、会員の皆様からの有益な情報を満載した内容にしたいと考えております。寄稿にご協力をお願いいたします。

発行 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr/index.html>

連絡先: 〒 532-0011 大阪市淀川区西中島 5-5-15 新大阪セントラルタワー 8F

(株)コネット アカデミックプラザ内 FAX: 06-4806-5658 担当: 木村雄一郎

JADR 副会長 小田 豊 (東京歯科大学歯科理工学講座)

連絡先: 〒 261-8502 千葉県美浜区真砂 1-2-2 FAX: 043-270-3780 E-mail: yoda@tdc.ac.jp

2006年2月28日 発行